

第3章 平成22年度の成果

第1節 講演会等の諸活動

平成22年度は、鹿児島県下の伊佐市、奄美大島、霧島市、鹿児島市、種子島、枕崎市の6箇所で対人援助の専門家への支援として講演会を実施した。今年度の講演会の流れは、以下の通りである。

1) 地域専門家との意見交換会

各地域の臨床心理学的支援へのニーズの把握のため、事業スタッフが対象地域に向き、現地の対人援助の専門家との意見交換会を実施した。

2) 講演会の企画

意見交換会で出されたニーズに沿った形で地域支援が行えるよう、現地のコーディネーターと打合せを重ね、講演会を企画立案した。

3) 講演内容の調整

事業スタッフが現地のコーディネーターの要望を集約し、講演会講師となる教員スタッフと講演内容のすり合わせを実施した。

4) 講演会の告知

講演会の案内文を作成し、関連機関に送付した。また公式ホームページ上にも情報を掲載した。

5) 講演会実施

講演会当日の準備等は、事業スタッフと各地域のスタッフの協同で実施した。

6) アンケート実施

今回の講演会の評価および今後のニーズの把握のため、講演会後にアンケートを実施し、回収した。

7) フィードバック

事業スタッフがアンケート結果を集計し、現地のコーディネーターにフィードバックを行った。

伊佐市講演会

日 時：平成22年7月27日 19:00～21:00

演 題：子どもの「気になる」行動，発達を通して考えてみよう

講 師：土岐篤史准教授

会 場：伊佐市大口ふれあいセンター

参加者：87名（保育士・幼稚園教諭・学校教員・医療従事者など）

主 催：伊佐市福祉事務所

共 催：鹿児島大学大学院臨床心理学研究科

後 援：南日本新聞社

同行事業スタッフ：川口智美非常勤臨床心理士，富宿小百合事務補佐員

伊佐市支援の経緯

伊佐市は，土岐講師がこれまでも臨床活動を行ってきた地域であり，子どもの発達支援を中心として，行政や専門機関などとのつながりがあった。近年，伊佐市では，他地域に先駆けて，子育て支援体制の充実化を目指している。その中心となっているのが，伊佐市福祉事務所所長の中馬節郎氏と保健師の満田智子氏である。そうした方向性に対するサポートの一環として，保育士や教師など，子どもに関わる専門職の方々の情報の共有化やネットワークの基盤づくりを目指し，本プロジェクトが携わることになった。そして，中馬氏，満田氏とやりとりを重ね，今年度においては，子どもの発達に関して，グループディスカッションを中心とした講演会を開催することとなった。

講演会概要

平日の遅い時間の開催にも関わらず，保育園，幼稚園，学校，医療機関，行政など様々な領域の支援者が集まってくださった。前半は，資料に基づき，子どもたちの発達に関する基本的なことについて講演を行った。後半は，地域で活躍されている保育士，小学校の校長先生のお二方より，実際の現場での子どもたちの「気になる」行動について話題提供いただいた。その話題に関する意見交換をあらかじめグルーピングされた小グループの中で行い，小グループでの議論と全体での共有が交互になされた。どのグループでも活発な意見交換，話し合いが展開されており，参加者のモチベーションの高さが窺えた。必要に応じて，土岐講師よりコメントがなされ，子どもの一つ一つの行動を発達的な視点から捉えての理解が全体で共有された。



伊佐市講演会



伊佐市講演会（意見交換）

アンケート結果概要

参加者

参加者の7割以上が保育士や教育関係者などであり、日常的に子どもたちの生活や支援に関わる職種の方であった。その大半が女性であった。現在の職業の経験年数は5年未満、5～10年、10～20年という人がそれぞれ3割前後を占めていた。

講演会参加の動機の内容

子どもの発達や対応などについて学びたい、話を聞きたいという動機が非常に多かった。実際に保育園や学校で、行動面や発達面において気になるケースに関わっている人も多く、対応についてヒントが得られればと考えての参加もあった。また、困ったときに相談したり、連携をとれるようなネットワークづくりを求めて参加する人もいた。

講演会への満足度および感想

伊佐市での講演会では、事例を通した小グループでのディスカッションに時間を多くとった。土岐講師の講義をもっと聴きたかったという声もあったが、他者の様々な意見を聴いたり、意見交換ができるという形式を多くの人が高く評価してくださった。また、講義やディスカッションを通して、参加者自身が今後の支援のあり方に対して何らかの気づきを得たという感想も多く見られた。

臨床心理士へのニーズ

日常関わりのある困っている事例に対して、専門的立場からの具体的なアドバイスがほしいという声が多くきかれた。また、子どもに対する支援のみならず、その親たちへの支援の必要性を感じている人も多いようである。（川口智美）

奄美大島講演会

日 時：平成22年10月26日 14:30～16:45

演 題：児童・生徒との対話 ―ロールプレイによる体験学習―

講 師：落合美貴子教授

会 場：奄美振興会館

参加者：23名（奄美市内小中学校養護教諭）

主 催：奄美市教育委員会

共 催：鹿児島大学大学院臨床心理学研究科

同行事業スタッフ：川口智美非常勤臨床心理士，富宿小百合事務補佐員

奄美大島支援の経緯

鹿児島大学は2003年度から「奄美プロジェクト」に着手し、これまでも大学を挙げて多方面からの奄美諸島への支援を行ってきた。こうした、本学と奄美地域とのつながりを通じ、関係機関とやりとりを重ねる中で、奄美市教育委員会学校教育課より支援の要望が挙がってきた。そこで、現場のニーズの詳細や今回の支援形態の在り方を探るため、現地コーディネーターを務めてくださった学校教育課主幹兼指導主事の長濱信博氏と意見交換を行う場を設けた。現場からは養護教諭に対して「開発的カウンセリング」に関する内容の研修を実施してほしいという要望が挙げられた。できるだけそのニーズに沿ったものを提供しようと協議を重ねた結果、本年度においては、「児童・生徒との対話」に焦点を当て、教員がより実践的な研修ができるよう、ロールプレイを中心とした体験参加型の講演会を行うこととなった。今回、行政の学校教育課の方との連携が円滑に行えたことは「奄美プロジェクト」等を通じて、鹿児島大学と奄美市が良好な関係を築いてきた結果である。

また、今年度は講演会実施までには至らなかったが、行政とも連携しながら活動しているNPO法人「チャレンジドサポート奄美」との関係づくりも行った。NPO法人「チャレンジド奄美」は障害児・者の支援に取り組んでいる機関である。その理事長である向井扶美氏とプロジェクトリーダーとの間に支援を通じたつながりがあり、今回、関係機関である「チャレンジドの店 あしたば村」と障害福祉サービス事業所「社会福祉法人三環舎 あしたば園」の見学および情報交換をさせていただく機会を得た。情報をいただく中で、職員のスキルアップの必要性を強く感じていることや成人期以降の利用者への支援や対応に困るケースについて、専門家からのアドバイスがほしいといったニーズが挙げられ、奄美への支援の必要性をあらためて感じることとなった。

講演会概要

つい数日前に襲った豪雨災害の復旧活動の真ただ中での講演会開催となったが、被害の大きかった一部地域を除き、島内小中学校の養護教諭23名が集まっての講演会となった。

まず、「対話」のある教育がどういったものかということやその目的、効果などについて15分ほど講演を行った。続いて、部屋を移動し、今回のメインであるロールプレイを通じた体験学習へと入った。最初はウォーミングアップも兼ねて、参加者に「ブリキ人間」「ぞうきん人間」になりきった動きをしてもらった。三者三様の動きが展開され、参加者の緊張もだいぶほぐれたようである。その後、三人組のチームで、1人が2人の様子を観察する形をとり、相手の短い話をそのまま真似して返すやりとりや、片方の人がある程度長い文章を伝え、それを聞いた相手はその人の気持ちをつかんで「今、～な気持ちなんですね。」などと返すやりとりの訓練などを行った。どのチームも熱心にやりとりに参加し、的確に相手の気持ちをつかむことの難しさや気持ちをわかってもらえたときの嬉しさなどを感じていたようである。

最後に、全体でのロールプレイ学習を行った。ここでは、参加者が日頃、保健室で体験したことのある状況や実際に体験したことのある児童・生徒のエピソードを募り、その中で典型的なものを抽出しながら落合講師が場面をつくっていった。たくさんエピソードが出されるとともに、ロールに対しても積極的に演じたいという動きが見られ、参加者のモチベーションの高さが窺えた。役割演技の中で生じた気持ちや疑問などについてはその都度、落合講師からコメントがなされ、全体で共有された。シェアリングでは、他者が演じる様子を見て、このような対応もあるのだという気付きがあったり、自分の対応を客観的にみられるよい機会になったなどの感想が聞かれた。

時間的に限られた中での講演会となったため、まだまだ物足りない部分もあったと思われるが、参加者にとっては日頃の体験を皆で共有し、客観的にみることのできる良い機会になったようである。

アンケート結果概要

参加者

今回の講演会は、奄美市の養護教諭の研修会だったこともあり、参加者は全員市内小中学校の養護教諭であった。40代、50代の中堅以上の教諭が7割近くを占めた。

講演会参加の動機の内容

元々、市の教育委員会によって年次計画として組み込まれている研修会であったため、8割以上が「学校からの要請」、研修として「計画されたものだから」という理由で参加している。

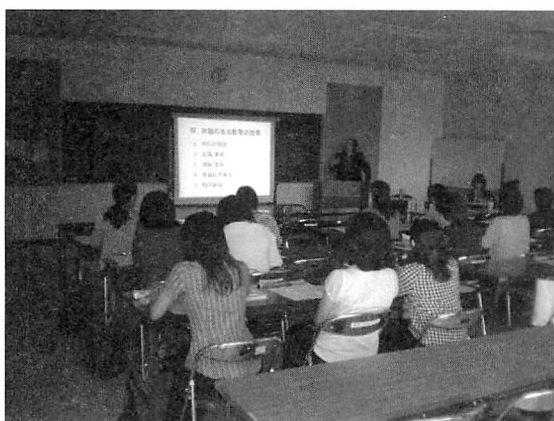
講演会への満足度および感想

ロールプレイおよび講演会全体に対しても参加者の満足度は非常に高く、両者とも9割以上が「大変満足」、「まあ満足」という回答であった。「充実した研修だった」、「リラックスしてロールプレイができた」など研修に対する満足感が多く語られていた。子どもへの対応を客観的に理解することができたというものや実際にロールを演じる体験を通して子どもたちの気持ちをよく理解できたという感想も多数見られた。

臨床心理士へのニーズ

離島ということもあり、各学校にスクールカウンセラーの配置が行き届いていない現状があるが、自分の学校にもスクールカウンセラーがいてほしいという声が多数きかれた。今回のような研修を養護教諭だけでなく、他の教員たちにもしてほしいということや精神疾患や治療、事例への対応について具体的にききたいというものがあった。

(川口智美)



奄美大島講演会（講義）



奄美大島講演会（ロールプレイ）

霧島市講演会

日 時：平成22年10月29日 15:00～17:00

演 題：母親に不安を与えない問診・指導技術について

講 師：服巻豊准教授

会 場：霧島市すこやか保健センター

参加者：32名（保健師，心理士，保育士など）

主 催：霧島市すこやか保健センター

共 催：鹿児島大学大学院臨床心理学研究科

同行事業スタッフ：上原美穂特任助教

霧島市支援の経緯

霧島市は、服巻講師が長年にわたって臨床活動を行ってきた地域であり、行政との連携も取れている状況であった。今回、本事業を展開するにあたっては、窓口を広げ、医療、福祉領域の対人援助の専門家を対象に事業説明会を実施し、地域のニーズの発掘を行った。事業説明会で、「これまで霧島市では、発達面で気になる子に対して、診断、親子教室、療育というような一連の流れをシステムとして整備してきたので、今回はそのシステムに主に関わる保健師に対して、研修をしてほしい」との要望が挙げられたため、ロールプレイを取り入れた講演会の実施に至った。

講演会概要

参加者の多くは、母子健診に関わっている専門家であったため、実際の母子健診の場면을想定してのロールプレイが中心となった。ロールプレイの導入にあたっては、参加者の緊張をほぐすことを目的にウォーミングアップをしたのち、3人1組のグルーピングを行った。その後、3歳児健診場面での保護者の気持ちを理解することに焦点を当て、グループごとに検診場面を設定してロールプレイを行った。ロールプレイを行う中で、現場で生じるであろう対応が難しい場面が再現され、「こういう場合は私はこうしてる」等、参加者の中でもディスカッションが行われていた。

全ロールプレイ終了後、保健師として健診場面での留意点や健診での子どもへのかかわりの重要性について服巻講師がまとめを行った。

アンケート結果概要

参加者

参加者の8割以上が保健師であったため、全体的にも女性が多かった。また、職業の経験年数は、10年以上20年未満の方が約3割、20年以上の方が約3割と現場での経験が豊富な方が多かった。

講演会参加の動機の内容

実務経験を重ねながらも対応に困るケースが多く、今回の講演会から対応のヒントを得たいといった自分のスキルアップのためという動機が非常に多かった。

講演会への満足度および感想

参加者の講演会への評価は高かった。満足度は「大変満足」11名、「まあ満足」16名、「どちらでもない」4名、無回答1名であった。

満足度が高かった一方で、「母親の気持ちを考えることができたが、時間が短かった」、「もっと時間をかけて、1つ1つの事例を深めたかった」という感想が多かった。

臨床心理士へのニーズ

「困った時の具体的な対応例などを教えてほしい」など現場での対応を相談する機会がほしいという要望が多く挙げられていた。

(上原美穂)



事業説明会



霧島市講演会

鹿児島市講演会

日 時：平成22年11月7日 10:00～12:00

演 題：臨床動作法における援助者としての心得

講 師：山中寛教授

会 場：かごしま市民福祉プラザ

参加者：74名（学校教員，心理士，医師，歯科衛生士，ソーシャルワーカーなど）

主 催：鹿児島動作法研究会

共 催：鹿児島大学大学院臨床心理学研究科

後 援：鹿児島市教育委員会

同行事業スタッフ：上原美穂特任助教，川口智美非常勤臨床心理士

富宿小百合事務補佐員

鹿児島市支援の経緯

鹿児島市においては、山中講師が中心となり、発達障がい児への臨床動作法による支援を10年以上前から行っており、鹿児島動作法研究会という形で地域に根付いた活動を行っている。今回、現地コーディネーターを鹿児島動作法研究会事務局長の中尾誠一氏（Tsukasa health care hospital, 臨床心理士）にお願いし、現場のニーズの把握をしていただいた。そこで、山中講師の豊富な臨床経験から現場での対応のヒントを得たいという要望が挙げられ、講演会開催に至った。今回の講演会では、参加者が個人として臨床動作法への理解を深めるだけでなく、地域の対人援助の専門家への啓発、専門家同士のネットワーク作りを目的とした。

講演会概要

「臨床動作法における援助者の心得」という演題の下、山中講師がこれまで臨床動作法を活用してきた経験を語った。肢体不自由児への援助に始まり、競技選手を対象としたスポーツカウンセラーの時代、学校教育におけるスクールカウンセラーの時代、精神科領域における臨床心理士の時代、そして自身のがん体験における自己治癒の話まで多岐に及んだ。これらの経験を通して得られた臨床動作法の導入の工夫と援助のコツ、さらに自己治癒のための自身のからだとの付き合い方を紹介した。質疑応答では、すでに臨床動作法を現場で実践されている参加者の方々から、援助者として臨床動作法を実施する際の多職種への説明の仕方について等、多くのご質問をいただいた。

アンケート結果概要

参加者

参加者は、臨床動作法による対人援助を行っている方々を中心に計74名であった。職種別にみると、学校教諭21名、臨床心理士18名、歯科衛生士2名、医師1名、ソーシャルワーカー1名、学生17名、保護者11名、その他3名であった。

講演会参加の動機

対人援助技法の1つとして臨床動作法を活用している参加者多く、更なるスキルアップのために参加したという意見が多かった。

講演会への満足度および感想

「講師の経験を基にした話がとても参考になった、すんなり理解できた」などの感想が多く、参加者からの評価は9割以上が「大変満足」もしくは「まあ満足」であり、非常に高かった。

臨床心理士へのニーズ

障がい児・者を長期的に支援する中で、自分の関わり方に自信をもてなくなるため、相談できる機会がほしいといった意見が複数あった。また、臨床動作法に限らず、その他の臨床心理学的技法（イメージ療法、コミュニティアプローチ、エンカウンター・グループ等）についても、学校教諭でも参加できる研修の場をもっと作ってほしいとの要望が挙がっていた。

(上原美穂)



鹿児島市講演会



鹿児島市講演会（質疑応答）

種子島講演会

日 時：平成22年12月18日 10:00～12:00

場 所：西之表市民会館大会議室

演 題：昨今の不登校の傾向と支援に向けた関わりについて

講 師：中原睦美教授

参加者：39名（学校教諭，養護教諭，行政関係者，医師，保健師など）

主 催：西之表保健所

共 催：鹿児島大学大学院臨床心理学研究科

同行事業スタッフ：上原美穂特任助教，川口智美非常勤臨床心理士

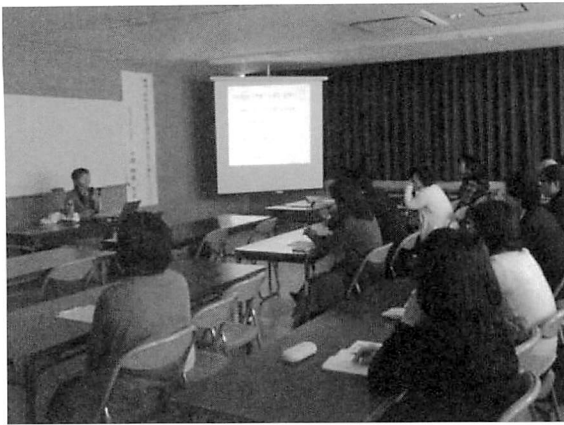
種子島支援の経緯

西之表保健所の所長である岩松洋一氏とプロジェクトリーダー・土岐講師との親交が以前からあり，研究科からのプロジェクトの打診に所長が興味を示してくださったところから関わりがスタートした。当初，研究科としては，子どもの発達に関するテーマでの講演会を予定していたが，現地コーディネーターを務めてくださった保健師の藤崎美代子氏と打合せをする中で，種子島の学校現場での不登校の問題が明確になっていった。そこで現地のニーズに沿い，教育関係者や行政機関職員などを対象に，不登校支援をテーマとした内容に切り替えた形で，今年度は講演会を実施することとなった。

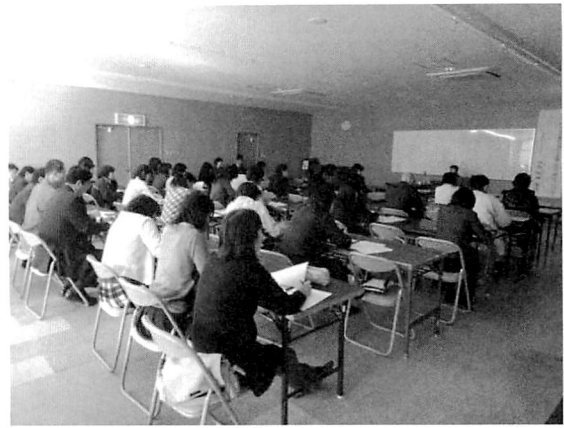
講演会概要

年末の慌ただしい時期の休日にもかかわらず，39名もの方が一堂に会していただき，関係者のニーズや問題に対するモチベーションの高さを強く感じることができた。今回の参加者の多くは学校教諭などの教育関係者であり，日常的に不登校児やその家族に一番近いところで関わっておられる方々であると思われる。

講演の中では，不登校の意味づけや分類，不登校をとりまく現代の複雑な環境についての講義，中原講師が臨床活動の中で，専門的に実践している「コラージュ・ボックス法」についての紹介を行った。中原講師がこれまでに体験した事例の経過やそれに伴う子どもたちの作品の変化を，その心理学的意味あいも含めて解説したところ，参加者も興味深い様子で聴いていた。最後に不登校児，その家族に対する支援についての話では，不登校問題に長期的スパンで関わっていくことの大切さや問題を支援者一人だけで抱え込むのではなく，周囲の安心できる人や専門機関を頼ることの大切さなどの視点が共有された。



種子島講演会



種子島講演会

アンケート結果概要

参加者

多くは学校教諭などの教育関係者であり、その他行政機関の職員、保健師などの参加があった。女性の占める割合が7割を超えており、特に40代、50代以上の年齢層の参加が多かった。現在の職業の経験年数は、10年以上の経験を積んでいる人で半数を占めていた。

講演会参加の動機の内容

参加者の多くは、不登校問題に関する情報や子どもや親への対応の仕方について「勉強したい」、「知りたい」という動機をもっていた。学校などで実際に気になるケースを体験したり、不登校事例が各学校で増えていることなども理由として挙げられている。

講演会への満足度および感想

講演会に対する満足度は高く、「大変満足」、「まあ満足」で9割以上を占める結果となっている。「あっという間の時間だった」、「勉強になった」など、話題に対する「充実感・満足感」が多く感想として出されていた。また、講師の話を通して、参加者も日々の体験を振り返り、今後の支援のあり方に対して気付きを得たというような内容も複数見られた。

臨床心理士へのニーズ

対応の難しい親や家族との関わり方、そしてその支援の方法について、専門家からのアドバイスがほしいという回答が複数見られた。また、島内に子どもの問題について相談できる機関や専門家が不足しているといった実情も出されている。

(川口智美)

枕崎市講演会

日 時：平成23年2月9日 15:00～17:00

演 題：ライフサイクルとこころのトラブルについて

講 師：金坂 弥起 准教授

会 場：枕崎ステーションホテル

参加者：54名（看護師，臨床心理士，ソーシャルワーカー，相談支援専門員，介護支援専門員，行政職員等）

主 催：社会医療法人 慈生会 地域活動支援センターうえるふえあ

共 催：鹿児島大学大学院臨床心理学研究科

後 援：枕崎市，南九州市，南さつま市，鹿児島県南薩地域振興局，

南薩地区障害者相談支援事業所連絡協議会

鹿児島県訪問看護ステーション協議会

鹿児島県医療ソーシャルワーカー協会南薩ブロック

鹿児島県介護支援専門員協議会南薩支部，鹿児島県精神保健福祉士協会

同行事業スタッフ：上原美穂特任助教，富宿小百合事務補佐員

枕崎市支援の経緯

枕崎市内の病院へは，当研究科およびその前身である人文社会科学研究科の修了生が数名就職している。その中で，ウエルフェア九州病院の今村智佳子氏に，本事業の趣旨を説明したところ，「地域活動支援センターうえるふえあ」の栄村孝子氏（精神保健福祉士）をご紹介いただいた。「地域活動支援センターうえるふえあ」は，枕崎市での地域支援の拠点を目指し，障がい者の日常生活の支援を行っているが，地域の専門家のスキルアップを図りたいとのことで今回の講演会開催に至った。講演会開催にあたり，栄村氏には企画から広報までご尽力いただき，最終的には，枕崎市に留まらず，周辺の南九州市，南さつま市にも，ご後援いただいた。

講演会概要

講義の冒頭では，ウォーミングアップを兼ねて，だまし絵を提示し，物事を多面的にみる必要性，人の心を理解する難しさを教示した。その後，平均的な発達のプロセスを理解することで臨床の場での基準になるとの狙いのもと，精神分析的，生涯発達心理学的理解に基づく乳児期から老年期の各段階の特徴について講演を行った。

質疑応答の時間には、参加者から積極的に質問を頂いた。参加者は福祉領域の対人援助職の方が多く、現場で困っていることに対して、臨床心理学的理解や技法を取り入れたいというモチベーションの高さが窺われた。

アンケート結果概要

参加者

参加者54名中、大多数が医療・福祉関係者であった。(介護支援専門員14名、支援員10名、保健師6名、PSW 5名、MSW 4名、看護師4名、臨床心理士3名、行政職3名、SW 1名、管理栄養士1名、歯科衛生士1名、社会福祉士1名、養護教諭1名)

講演会参加の動機の内容

対人援助の仕事をしている中で難しさを感じており、その難しさを打開する契機になるのではないかと期待されている方が多かった。

講演会への満足度および感想

今回の講演会を通して、生涯発達の基本を理解することができたという感想が多かった。基本を理解した上で、次は各段階に特化した話を聴きたいという要望が強かった。

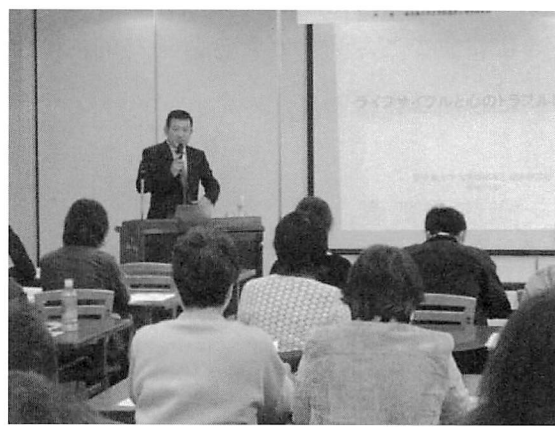
臨床心理士へのニーズ

「対応困難な具体例を挙げて、対処方法についての話を聴きたい」、「現場での対応についてスーパーバイズを受けられる場がほしい」など専門的立場からのアドバイスを求めている方が多かった。

(上原美穂)



枕崎市講演会



枕崎市講演会 (質疑応答)

第2節 他大学視察

<追手門学院大学大学院心理学研究科>

日時：平成22年7月23日（金）15：00～16：30

出向者：安部恒久教授，上原美穂特任助教，川口智美非常勤臨床心理士

報告：

当日は、心理学部心理学科心理学研究科長の井上知子教授，地域支援心理研究センター長の中鹿彰准教授，心のクリニック室長の溝部宏二准教授に施設案内をしていただき，その後，情報交換会が開催された。以下，概要を報告する。

追手門学院大学は，平成16年度から平成20年度にかけて，私立大学学術研究高度化推進事業「心理学の地域貢献に関する研究－地域社会との連携による心理的問題についての解決および支援の方法の開発－」（オープン・リサーチ・センター整備事業）に取組み，現在は，その成果を基に地域支援の実践を行っている。地域実践の基点となるのが，大学内に設けられた「地域支援心理研究センター」という大学独自の施設である。同センターは，研究施設であり，「心のクリニック」という地域住民に開かれた心理相談室としても機能している。そのため，地域住民が活用しやすいよう，大学敷地内にありながらも学生の往来が少ない場所に位置するという配慮がなされていた。これは，建物の設計段階から，井上知子教授をはじめ教員が積極的に関与した賜物であろう。

また，大学としての地域支援活動を広報するために，ホームページの充実が図られ，ホームページの管理運営は，そのための予算立てを行い，外部機関に委託されていた。

（安部恒久・上原美穂）



追手門学院大学 地域支援心理研究センター前
（左：井上知子教授）



追手門学院大学 地域支援心理研究センター外観

<神戸女学院大学大学院人間科学研究科>

日時：平成22年8月2日（月）13:00～17:30

出向者：土岐篤史准教授，上原美穂特任助教，川口智美非常勤臨床心理士

報告：

視察日は、大学相談室の活動を地域の住民に広報することを目的とした「心理相談室ウィーク」の期間中であった。石谷真一教授による「世代間伝達と関係性の問題―手がかりは生い立ちの中に」をテーマとした地域対象の講演会に参加，その後，相談室内の施設見学をさせていただいた。講演会には約50名の参加者があり，地域の方々の関心の高さが窺われた。相談室施設は学内に独立して建てられており，地域の景色に溶け込むような素敵な概観であった。多くの関係者が視察見学に来られることも頷けた。

その後，國吉知子教授，石谷真一教授，小林哲郎教授，須藤春佳講師，奥田紗史美講師に情報交換会のお時間をいただいた。同大学院では，地域支援に関する教育カリキュラムとして，2年生を対象に「臨床心理地域実践実習」を開講し，実践教育を行っているとのことだった。内容としては，精神科クリニック，学校現場，福祉施設等への外部実習であるが，その中で特徴的なのは，充実した長期実習であった。実習先は原則として通年で1施設，頻度としては週1回。継続的に実習先に通うことで，他職種との連携，地域住民との関わり方等を体験的に習得できる利点があるとのことだった。

また，地域とのつながりの一環として，スーパービジョンの外部委託が挙げられていた。学外での指導は，心理臨床における多面的な理解の促進に有効とのことだった。

今回の視察を通して，大学院としての地域支援の在り方，地域支援を実践できる心理臨床家を育成するためのカリキュラムの工夫に関して，多くのご示唆を頂いた。

（土岐篤史・上原美穂）



神戸女学院大学 心理相談室前

（左より，國吉教授，土岐准教授，石谷真一教授，上原特任助教，川口非常勤臨床心理士，小林教授，須藤講師，奥田講師）

第3節 海外視察

BUP&Karolinska Institutet 視察報告

1. 視察内容： BUP (Barn-och ungdomspsykiatri/neuropsykiatri：児童青年期精神医療)は、スウェーデン全土において各県が運営する0～17歳の児童生徒が対象の医療センターである。家庭内暴力、性的被害、戦争難民、引きこもりなどの外来および入院治療を行なっている。公的機関であるため、保健、福祉、教育との連携が容易であり、法的根拠に基づいて早期から支援計画を立て遂行することができる。特に、本地域支援プロジェクト事業において、人材育成や教育体制においてヒントが得られるような視察を行うこととした。

2. 視察機関ならびに視察手続き：0～17歳までの発達支援ならびにこころのケアを行う専門機関ならびに研究機関である以下の施設、研究機関を視察機関として選定した。視察機関への依頼手続きについては、プロジェクトリーダーの研究協力者であるKarolinska Institutetの客員教授である吉武尚氏に依頼し、その紹介によりDr. Serlachiusが本視察のコーディネートをし、今回の視察が可能となった(表1)。

- (1) ストックホルム県 BUP
- (2) Karolinska Institutet
- (3) Stockholm University

表1. 視察コーディネーター等

期 間	平成23年3月8～14日
視察者	土岐篤史 准教授 (プロジェクトリーダー) 服巻豊 准教授 (プロジェクト コ・リーダー)
通 訳	大橋紀子氏 (通訳・ガイド会社：霧仙) Swedish-Japanese 通訳
視察コーディネーター	Yoshitake Takashi, PhD, Guest Professor, Department of Physiology Section of Pharmacological Neurochemistry, Karolinska Institutet Eva Serlachius, MD, PhD, BUP divisionen stockholm center for psychiatry research

3. 視察目的：本視察においては、スウェーデンの公的医療システムにおける BUP ならびに研究機関である Karolinska Institutet を対象として、以下を目的とする。

(1) BUP (ブップ)、Karolinska 研究所での支援施設ならびに研究機関視察：児童青年期精神医療（サイコロジスト、児童精神科医、ソーシャルワーカーなど）の人材センターにもなっており、発達障害の早期発見、虐待児童を含む地域支援実践と専門家臨床教育の拠点にもなっている。よって本地域支援プロジェクト事業のモデルとして相応しい施設として、子どもの発達ならびにこころの支援システムの実際の業務、研究ならびに専門家臨床教育について学ぶ。

(2) 次年度以降の招聘可能性の検討：Harald Strum（児童精神科医）をはじめとする地域支援の臨床現場で活躍している人材との継続的な人的・知的・技術的な交流を維持し、日本―スウェーデンにおける地域支援における臨床的支援技術や知識の共有ならびに共同研究の基盤を築き、次年度以降の招聘の可能性を検討すること（※視察概要による詳細は表2を参照のこと）。

4. 視察報告

今回の視察では、7か所の視察を行い、0歳から17歳までの児童青年期の子どもたちの地域支援について学んだ。スウェーデンにおいては、18歳は成人であり、家庭から出ていき自立した生活をするようになる。

BUP (ブップ)、Karolinska 研究所での支援者(サイコロジスト・児童精神科医等)との施設概要・支援内容の説明を聞き、相互の知識の共有のためにディスカッションを行い、以下の点について学ぶことを得た。今後の本事業においても重要な点についてまとめて報告することとする。

(1) BUP の地域支援のシステムと全体像

スウェーデンにおいては、15歳から29歳の死亡原因の第一位は自殺である。スウェーデンの子どもたちの5～10%は心理学的問題か疾患を抱えているため、児童青年期の子どもたちの支援は重要かつ緊急な課題である。BUPでは年間18,000人の子どもの新患が受診し、外来で130,000人をフォローしているとのことであった。BUPは、児童精神科のクリニックであり、Patient Category と Structure に8分割し、外来施設では1施設につき30名のスタッフがおり、子どもたちの支援を行っている。

BUP Division は、外来診療、病院（入院施設）、専門分野にわかれており、外来診療では800名のスタッフがおり、90%の患者がフォローを受けている。病院では200名のスタッフがおり、24時間体制で7%の患者が入院している。専門分野では75名のスタッフがおり、3%の患者がフォローを受けている。外来診療では、その後、学校、福祉、ハビリテーション（自閉症センター、アスペルガーセンター、ADHDセンターなど）に紹介されたり、小児科に紹介されたりする。BUPは、子どもたちの発達障害や精神科疾患の診断に携わり、その後の教育や福祉にかかわる重要な法律で守られるための重要な役割を担っている（図1）。

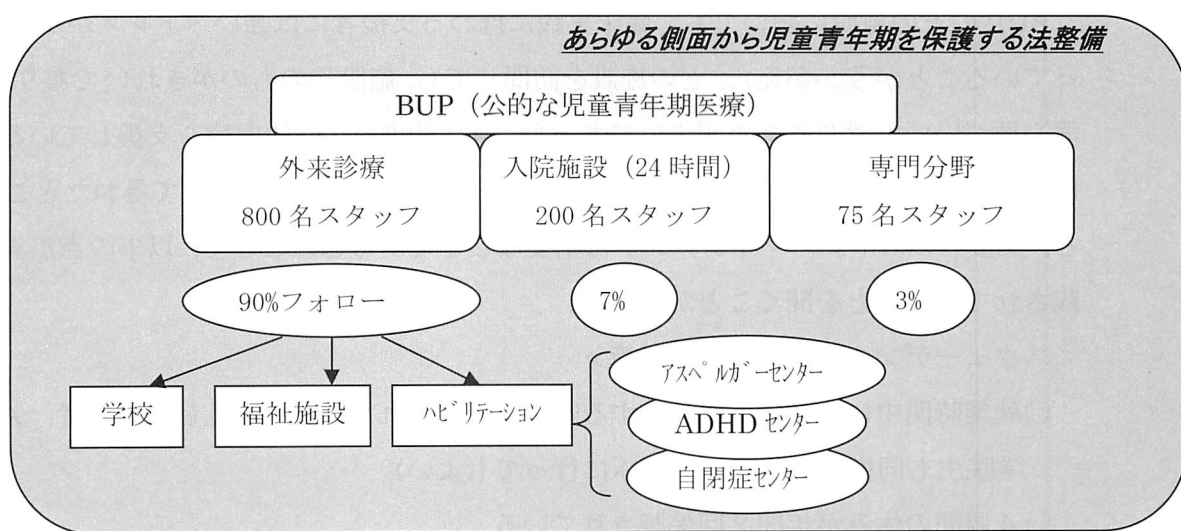


図1. BUP Division の概要

(2) 専門家のトレーニングについて

1) 心理士 (Psychologist) のトレーニング

心理士は、大学での5年間で基礎科目ならびに実習（50回の被カウンセリング経験を含む）を受けて卒業する。卒業後、PTPという1年間の実習期間でスーパービジョンを受けながら実際のケースを担当する。そして心理士の資格を得ることができる。

2) 児童精神科医 (Child Psychiatrist) のトレーニング

児童精神科医は、大学の医学部で5年半学び、2年のトレーニングを受け、臨床トレーニングを5年間（1年間小児科、1年間一般精神科、1年間その他の診療科、2年間BUPでの臨床経験；BUPでは学校、ハビリテーションでのトレーニングを

受ける) 受けることで資格が得られる。Olav 氏, Per-Anders 教授は, 現在, それぞれ児童精神科医 30 人の臨床トレーニングを行っているとのことであった。

3) 心理療法家 (Psychotherapist) のトレーニング

別途, 心理療法家の資格があり, それぞれの資格取得後, 3 年間のトレーニングを受ける必要がある。心理療法家には, 児童精神科医, Socionom (ソシオノム, 通称カウンセラー), 看護師, ソーシャルワーカーであっても 3 年間のトレーニングを受けることにより心理療法家の資格を取得することができる。

4) 支援者のストレスマネジメント

BUP のどの施設においても, 臨床実践に携わる支援者には強いストレスがかかっていることがうかがえた。どの施設を訪問しても, 施設そのものがきれいであり, 居心地がいいと感じるたまたまいであった。身体的虐待, 性的虐待を支援している BUP Grinden のサイコロジストたちにストレスマネジメントについて尋ねたところ, 支援者のストレスマネジメントは重要なことであるとのことで, 以下の点が実践されていることを聞くことができた。

<スウェーデンの就労者共通の対策>

- 就業時間中に 1 時間, 運動をする時間が設けられている (会社員, 研究者, 大学院生も同様; 散歩してもジムに行ってもよい)
- 4 週間の休みが年間 2 回保証されている
- 職員の休憩所など居心地のよい場所を提供する

<Grinden での取り組み>

- 全職員が万歩計をつけ, チームを作り, 計測値の月間チーム競争を行っている (勝利チームにはなにか褒美がある; これでチームの仲間意識が高まる)
- 虐待にかかわる仲間とのコミュニケーション (定期的に地域の専門家との会議)
- グループスーパービジョンを受ける (他機関の専門家による助言を受ける)
- 虐待にかかわる世界の仲間とつながる (国際学会や会議, インターネットで相談をしたりする)

(3) 共同研究ならびに知識・支援ツールの共有の可能性について

1) 子どもの精神疾患に対する WEB 上での支援ツール

BUP では, 積極的に国外の情報も活用し, イギリスでつくられた子どもの精神科疾患に対する WEB 上のマニュアルもスウェーデン語に訳し, 運用

会議にも参加して積極的に活用している。日本語での活用も可能であり、翻訳許可はイギリスの専門家に了解を得ることができるとのことであった。

2) 性的虐待児童に対するツールボックスの日本語翻訳とワークショップ開催

BUP Grinden の Director でサイコロジストの Anna Norlén は、同僚の Moa Mannheimer とともに性的虐待を受けた子どもたちのグループセラピーや具体的な支援を行ってきている。これまでのノウハウと先行研究結果をもとに、性的虐待児童の回復を目指した具体的支援ツールとして The VASA TOOL BOX (ツールボックス) を作成し、性的虐待児童の支援者に対するワークショップもヨーロッパ地区にて開催している。

今回、Anna Norlén からは、日本語翻訳の許可ならびに日本におけるワークショップ実施 (Anna が来日) についても了承が得られた。

3) KIND (Karolinska Institutet Neurodevelopment Disorder) の成果・資料の共有

Sven Bolte は、Karolinska Institutet の教授として 2010 年末に赴任し、神経発達障害の子どもから成人までの最先端の研究を行い、具体的な支援と地域支援システムの構築を目指す新しいプロジェクトを立ち上げた。Sven Bolte は、発達障害児の特性を踏まえた PC を活用した支援ならびに遺伝子レベルの研究を世界の発達障害研究者とともに共同研究 (Nature Letter 掲載) しており、KIND においてもその研究実践を継続し、それを地域に根差していこうとする実践研究でもその研究成果は世界へと発信していく。我々も KIND の動向に注目し、人的交流を継続し、いち早く発達障害の研究情報を手に入れることができるようにしていくこととする。

4) Stockholm 大学での発達心理学者と発達支援者との協議会への参加

Stockholm 大学の発達心理学教授の Ann-Charlotte は、地域の発達支援 (低出生体重児、発達障害児等) を実践している研究者や支援者たちを集め研究会を開き、具体的な支援についての方策を作る協議会を行っている。今後のスウェーデンの施策に取り込まれる可能性のある重要な協議会であり、

日本の発達早期発見システムや支援のノウハウの提供ができれば、我々も参加できる可能性があるとのことであった。

(4) 日本への招聘の可能性について

以下の4名については、日本への招聘の可能性について内諾をいただいた。

今後、どのような目的ならびに本事業プロジェクトと合致した企画により招聘者に依頼をしていきたい。

① Olav Bengtsson, Child Psychiatrist, Director for BUP, Stockholm

BUPの概要ならびにスウェーデンにおける子ども支援にまつわる行政ならびに法整備についての説明および子どもの発達・こころの支援の専門家トレーニングが依頼できる。

② Per-Anders Rydellius, Professor, Child Psychiatrist, Department of Women's & Children's Health Astrid Lindgren Children's Hospital, BUP, Karolinska Institutet

発達障害についての世界水準の研究ならびに早期発見、支援に関する先端研究についての概説および発達障害者支援の専門家トレーニングを依頼できる。

③ Harald Sturm, specialist in child-and adolescent psychiatry, Neuropsykiatriska resursteamet Sydost, BUP Farsta

Farstaにおける現場の児童精神科医である。早期診断の実際と臨床家としての経験に基づく講義ならびに発達障害者支援の専門家トレーニングを依頼できる。

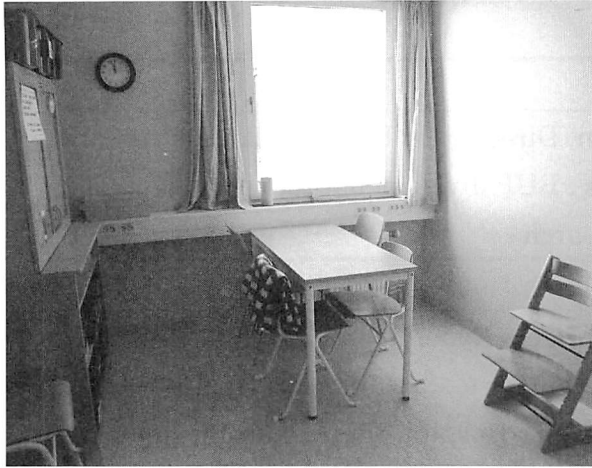
④ Anna Norlén, Psychologist, Director of BUP Grinden

身体的虐待、性的虐待の支援実践を行っているサイコロジストである。性的虐待児童の支援ツールを作り、ワークショップを行っている。本人支援ならびに専門家支援としてのワークショップを依頼できる。

(服巻豊・土岐篤史)

表 2. 視察概要

視察スケジュールと内容	
Tuesday 8th of March	
(1) 14.00-15.30	Olav Bengtsson, Director for BUP, Stockholm Eva Serlachius, BUP divisionen, Stockholm center for psychiatry research
Wednesday 9th of March	
(2) 10.00-12.00	Professor Per-Anders Rydelius, Department of Women's & Children's Health Astrid Lindgren Children's Hospital, BUP, Karolinska Institutet
Thursday 10th of March	
(3) 10.00-12.00	Sven Bölte, Professor of Child & Adolescent Psychiatric Science, Director of the Center of Neurodevelopmental Disorders at Karolinska Institutet (KIND)
(4) 14.00-16.00	Harald Sturm, Child-and adolescent psychiatrist, BUP Farsta
Friday 11th of March	
(5) 10.00-12.00	Noam Ringer, Psychologist, Autism Center Rosenlund
(6) 13.00-14.45	Anna Norlén, Psychologist, Director of BUP Grinden Moa Mannheimer, Psychologist, BUP Grinden
Monday 14th of March	
(7) 9.00-10.00	Ann Charlotte, Professor, Stockholm University Aiko Lundequist, PhD, Karolinska Institutet and Stockholm University



ハビリセンター (自閉症センター療育室)



BUP Farsta (ゆったりした待合室)



ハビリセンター (自閉症センター療育室)



BUP Grinden での打合せ
(右手前 Ms. Anna. 中央 Ms. Moa)



BUP Farsta (発達障害診断のための診察室)



BUP Grinden (スタッフミーティングルーム)

第 4 節 学会およびその他の視察

日本心理臨床学会 第 29 回秋季大会

開催日時：平成 22 年 9 月 3 日～5 日

開催場所：東北大学川内北キャンパス，百周年記念会館川内萩ホール（仙台市）

出向者：安部恒久教授，中原睦美教授，金坂弥起准教授，土岐篤史准教授，

服巻豊准教授，上原美穂特任助教，川口智美非常勤臨床心理士，

富宿小百合事務補佐員

報告：

<学会等の印象>

東北での開催ではあったが，事例研究 142 演題，ポスター事例研究 33 演題，基礎・調査研究 104 演題，ポスターセッション 286 演題と質量ともに充実した大きな学会であった。なかでも発達障害児・者への心理療法，コミュニティの資源を活用した心理援助の事例報告・ポスターセッションならびに基礎・調査研究も多く，発達障害児・者支援とそれにとまなう地域との連携の重要性が心理臨床活動の流れにも重視されるようになった印象があった。

<印象に残った発表・報告>

印象に残った事例研究演題の一つとして，「不確実さのなかで骨髄移植を受けた 50 代女性との関わりを通して」がある。発表者は，九州がんセンター白石恵子氏であった。移植を受けても助かる可能性は 10% 満たないことを知りつつも化学療法を受けながら骨髄移植を受け，最後まで可能性を信じつづけ，不確実ななかにもその方らしさが浮き彫りとなる事例であった。その事例との関わりを通して臨床心理士は，不確実さをそのまま抱えるサポートを行いつつ本人の判断，自己決定を丁寧に支えていた。不確実さのなかでの判断は，確実性を求める医療従事者との間でも不協和音を起こし，本人と医療従事者との橋渡しの役割をも臨床心理士が担い，本人を取り巻く家族，医療従事者を含むコミュニティの見立てと介入の必要性，死に直面した判断を支えるには本人だけでなく，家族，医療従事者にも危機的介入を行う，臨床心理士の柔軟でかつ強靱な意志の必要性を実感した。こうしたことは，地域支援を行うなかでも地域を包括的に理解して支援を俯瞰して行うばかりでなく，個人の危機状態をいかに周辺のコミュニティに橋渡しをする方向での危機介入の必要性があることを示唆してくれる事例研究であった。

また，シンポジウムや発表全体の印象として，「地域支援」と位置づけられているもの

の多くは、比較的、近隣地域にある機関や対象に対しての支援であり、本プロジェクトが目的の一つとする遠隔地域への支援というものが、本学地域において特徴的なものであることを強く実感した。その中で今回、地域支援に関連する発表の一つとして、ポスター発表の「地域臨床活動における院生コーディネーターの役割について（１）（２）」というものがあった。臨床心理士を志望する大学院生が、地域の学校現場で支援活動を行っている学生に対し、連絡調整や情報交換、アドバイスなどを含めたコーディネート活動を行っており、それが学生の活動の充実化につながっているとの報告であった。こうしたコーディネート機能の充実は、地域支援において、地域の援助者（教員や保健師、医療従事者その他）にコンサルテーションやスーパービジョンを行っていく上でも、ベースとなってゆくものであると思われた。（服巻豊・川口智美）

日本ストレスマネジメント学会第9回学術大会

開催日時：平成22年7月31日～ 8月1日

開催場所：立正大学 大崎キャンパス（東京都）

テーマ：こころの扉をひらくストレスマネジメント教育

～学校・地域・職場での実践のために～

出向者：松木繁教授

報告：

「こころの扉をひらくストレスマネジメント教育～学校・地域・職場での実践のために」をメインタイトルに開催された本学会では、ストレスマネジメント教育の実践を学校現場に限らず、地域・職場まで広げて議論が展開され、ストレスマネジメント教育をキーワードにした地域支援のあり方を考えるのに非常に有意義な学会であった。

特に、印象に残った実践発表としては、特別講演で発表された、日本で初めての冒険遊び場『羽根木プレパーク』を主宰する天野秀昭氏（大正大学教授）の「遊育のすすめ～遊びは生きる力の源」の実践報告および研修講演として発表された「赤鼻のセンセイ」のモデルである副島賢和氏（昭和大学病院内さいちか学級教諭）の「院内学級の子どもたちの教えてくれた大切なこと」であった。共に、ストレスマネジメントの考え方を教義に捉えるのではなく、子どもたちの生きる力とサポート力と捉えて実践を行っていたことで、地域支援を行っていくうえで重要な示唆を与えるものであった。（松木繁）

日本教育心理学会第52回総会

開催日時：平成22年8月27日～29日

開催場所：早稲田大学（東京都）

出向者：落合美貴子教授

報告：

自主シンポジウム「教育支援センターの不登校支援に関する諸問題（Ⅲ）不登校の子どもはなぜ教育支援センターに行けるのか？」に参加した。横浜市教育支援センターからは、一人ひとりの状況に応じた学習支援の工夫が報告され、「できる・わかる」をキーワードに地道な実践が展開されていた。また、海老名市教育支援教室では、「食育」、「ソーシャルスキルトレーニング」の観点から、調理実習を取り入れた活動報告があった。事前の計画から買い物、調理、会食等一連の実習から、物事を見通す力や役割による自己有用感等の児童生徒の成長が図られ、学校復帰や自立を促進させたとしている。さらに秦野市適応指導教室では、個別活動と小集団活動を組み合わせて社会適応力を養っている。担当スタッフとの二者関係確立し、それを土台に集団活動で一体感や達成感を育てていくとのことであり、発達にかなった実践であると感じた。

地域におけるこのような実践は、学校現場における教育やスクールカウンセリングとはまた異なった機能を持ち、臨床心理士もこれらの重要性を心に留めて臨床に携わる必要があると感じた。（落合美貴子）

FOUR WINDS 乳幼児精神保健学会 第13回学術集会 in 佐賀

開催日時：平成22年10月30日～31日

開催場所：武雄市文化会館（佐賀県武雄市）

出向者：金坂弥起准教授

報告：

カリフォルニア大学サンフランシスコ校精神科教授のアリシア・リーバマン先生の市民公開講座「子どもと家族に幸せな『子育て』とは」をはじめ、慶應義塾大学医学部小児科学教室の渡辺久子先生による基調講演「乳幼児期のトラウマ」、さらには聖マリア学院大学の橋本武夫先生やクリニック川端の川端友二先生の教育講演など、普段なかなか聞くことのできない著名な先生方の講演を聞くことができた。佐賀県武雄市という小さな地方都市での開催ではあったが、会場は満席に近く、熱気あふれる2日間となった。

また、地元である佐賀県や隣接する長崎県での息の長い地道な取り組みが多く報告され、その地域独自の特性や文化を考慮に入れた、地域密着型の支援のあり方やその工夫の仕方について、心理臨床にも活かせる多くの示唆を得ることができた。(金坂弥起)

2010年日本リハビリテーション心理学会

第36回心理リハビリテーションの会全国大会(愛知大会)

開催日時：平成22年12月10日～12日

開催場所：名古屋国際会議場(名古屋市)

テーマ：「地域」で共に生きる・共に育む

出向者：上原美穂特任助教

報告：

学会企画シンポジウム「現象としての肢体不自由」では、熊谷晋一郎氏(東京大学先端科学研究センター)から、現在、小児科医師として医療に携わる一方で、脳性マヒのある当事者として幼少期からリハビリを受けてきた経験、その中で心理臨床家からの支援をどのように受け、その中で何を感じてきたのかという話題提供があった。生誕、間もなく障がいがあると診断され、物心つく前から始まっていたリハビリの中で、親の思い、心理臨床家の思い、そして当事者の思いにズレが生じていたが、子ども時代の自分はそれを自分から言うことはできず苦しんだ時期もあったとのことだった。このシンポジウムは、臨床心理士としての自分の臨床活動を改めて顧みる機会となった。

また心理リハビリテーションの会分科会「親の会」では、臨床心理学的技法の1つである臨床動作法による支援を受けている障がい児の保護者と特別支援学校の教諭から話題提供があった。そこでは、保護者は一方的に各種の支援を受けるだけでなく、地域の中で保護者同士のネットワーク作りをすることが重要であることが述べられた。こうしたことから、臨床心理士が障がい児・者に対して継続的な支援を行う上では、その個人だけでなく、保護者も含めコミュニティへのアプローチが必要であるという貴重な示唆を得られた。また、本会は、専門職だけが集まるのではなく、支援を受けている側が参加し、意見交換を行うという貴重な会であった。(上原美穂)

札幌学院大学臨床心理学研究科開設10周年

心理臨床センター開設15周年記念講演会

開催日時：平成22年7月18日

開催場所：札幌学院大学（江別市）

テーマ：創造性と心理臨床

プログラム：講演Ⅰ「劇的な精神分析」 講師 北山 修 先生

講演Ⅱ「芸論と心理臨床」 講師 前田 重治 先生

対談「創造性をめぐって」 前田 重治 先生／北山 修 先生

出向者：中原睦美教授

報告：

本講演会および対談の場には、一般市民含めて600人が参加していた。

今回の出張では、上記の記念行事への参加に前倒しして、札幌学院大学の地域貢献について、臨床心理学研究科長の井手正吾先生、子ども発達学科学科長鈴木健太郎先生及び奥田統己先生から直接お話を伺うことができた。同大では、大学の予算にて江別市民を対象とした出張講演会を企画したり、地域への広報及び受験生確保のためホームページやブログを作成したりすることを積極的に取組、情報発信を常態的に行っているとのことだった。また、記念行事に先立って研究科同窓会の立ち上げにも参加し、大学内・外の充実への実践を目の当たりにしたように感じた。また、札幌学院大学の実践からは、地域連携のあり方への模索や相談室ケースの減少傾向への対処など、鹿児島大学と類似した課題があることが共有され、継続的な活動の必要性が示唆されていたように感じた。

講演会は、心理臨床領域・精神分析における大御所の先生方のご講演及び対談であり、心理臨床から日常まで、基礎から応用までと深く幅広く充実した貴重なものであった。このような試みは、大学としては負担があるだろうが、大学の存在や実績を地域社会に広く知らせる企画であるとともに、在籍生や修了生にとっても出身大学への自負心を自ずと喚起できる企画であると改めて感じた。（中原睦美）